

七色の「姫君」

杵夜龍司

I 七色の「姫君」

杵夜龍司

1

まえがき

5

一 シャロットの騎士

6

二 シャロットの民

15

三 シャロットの怪物

26

あとがき

42

II 「ラインスロットの見た夢」 44

七色の「姫君」

杵夜龍司

まえがき

シャロットの島に住んでいるのは誰かと問いかければ、おそらく多くの方が、塔の中で鏡と向き合いながら機織りをするあの美しい「姫君」を想像することでしょう。しかし、仮にそうでなかったとしたら？もし人種、性別、身分などあらゆる条件の異なる人物だったとしたら？物語の始まりや終わりが異なってくるのは勿論、もはや作品の存在意義すら変わってくることでしょう。

そこで、私は様々な主人公を配置することによって、自分の思想の断片を投影してみようと考えました。思考回路の分身、それこそがこの作品の存在意義です。

シャロットの「姫君」が織物を織るのと同じように、私もまた自分の「鏡」に映る物語を織っていきたいと思います。

ここは私の世界だ。他の者は存在し得ない。だが、そういう「私」はいったい何者なのか、自分でもよく分からない。分かる必要もないだろう。そもそも人が自身を何者かに位置づけたがるのは、他の人間と己を区別するためにすぎないのだ。ならば、孤独の世界に住む私が、そのような必要性を持つはずがあるまい。

ただし、一つだけ言えることがあるとしたら、それはこの織物が「私」だということであろう。私の生み出した創造物なのだから、これは私の一部に違いない。いや、むしろ一部とは言わず、全てであるとすら確信しているのである。だとすれば、この織物に描かれる者は皆、「私」だと言えるのだろうか？少なくとも、そうであると私は信じている。ここに写す何もかもが、川も、森も、人々も、私の「魂」を写した影なのだ。

では、お前はいったい何であろう？目の前に立ちただかる不滅の鏡よ！お前は世界の全てを見せてくれると言ったな。そのおかげで私は今こうして広い視野を持ち、多種多様な画を描くことが出来るのだろう。これはおそらく私の「眼」だ。薄暗い魂へ光りを当てるために、欠くことの出来ない唯一の眼差しだ。つまり、人類にとつての太陽と等しく絶対的な存在であり、疑ったことなど一度たりともなかったはずだ。それなのに最

近、私は二度もお前を疑った。

一度目は月影さす晩のこと。刈り人たちが麦束を重ねつつ、耳を澄ませて囁く声は「あれこそ妖精のシャロットの姫君よ。」あの時、鏡に「姫君」らしきものは何も映っていなかったにも関わらず、確かに彼らは見えない「何か」をこちら側に指差しながら囁いていたのであった。私は非常に混乱した。この私の眼に映らないものがあり、知らない世界があったとは！

二度目の晩も月が出ていた。二人の村人が川岸に佇み、熱に浮かされたような顔で言葉を交わしている最中のことだった。私は、彼らの顔つきが何処か尋常でない雰囲気を感じ出していることに気づき、激しい不安を感じた。あれも間違いなく私の知らない世界であった！

では一体何を「知らなかった」のか、今でもはっきりと言うことは出来ないが、その時あまりの衝撃に、私は織物の手を止めて呟いた。「半ば影の世界が嫌になった」と。思えばそれはごく自然に吐かれた言葉だった。もしかしたら最初の混乱の時から、頭では考えないにしても、心の中では感じていたことなのかもしれない。

知らない世界をさも知っているかのように錯覚して、不完全な太陽を盲目的に信用しながら、間違っって映し出された魂の影を描いていくことに、あの時の私は心底うんざりしていたのであろう。

そして、今もまた同じような感情が、私の脳内で言葉に姿を変えようとしているのである。

先程、この部屋のひさしから矢の届くほどのところを、大麦の束の間を縫ってかの人が駆けて来た。空気に浮かぶかのごとく軽やかに跳ねる小さな金色の靴が、太陽の光りを受けて眩い輝きを放っている。

華奢な体は白い絹に包まれて柔らかな線を描き、丸みを帯びた細い肩は歩を進めるごとに小さく上下する。指先を隠すほどの長い袖がひらひらと揺れる様は、胡蝶の羽根の優雅な所作を連想させた。絹のように艶やかな漆黒の髪は、南風に吹かれてさらさらと流れ、朱のさした頬の色を際立たせる。

そして何より、見る者の視線を奪うあの黒い瞳！見つめた途端に吸い込まれてしまいそうな二つの宝石は、水晶のごとく透き通り、何とも言えない神秘的な輝きに満ち溢れている。炎のように熱く燃えるかと思えば、氷のように冷たくも映るこの未知の光に、私はほんの一瞬で魅了されてしまった。

今、願うことはただ一つ、「あの瞳で見つめて欲しい、この私を！」

しかし、待てよ、これは少し可笑しくないか？「私を」だと？ここで言う「私」とは一体何を指しているのだ？「私」の眼はこの鏡であり、「私」の魂はこの織物である。他に「私」は存在しないはずだ。しかし、鏡や織物を見つめて欲しいというわけではな

からう。だって、あの方はまさにその中に映り、写されようとしているのだから。だとすると、いったい何を見つめて欲しいのか？鏡と織物以外に、何者かの「私」が存在するとも言えるのか？

分からない。それなのに、このような願望が起こっているのは不可解だ。もしかして、心の底では分かっていたのではないか？別の「私」が何処かに存在するということを……いや、そんなことは断じてありえない！孤独の世界に住む「私」は、何者でもないはずだ。だから、見つめるという行為の対象には決してなり得ないのだ。それなのに、これは一体どうしたことか？

私は激しい混乱に陥った。そして苦悩の果て、何を考えたのか発作的に立ち上がり、機を離れると、部屋の中を三步あるいた。窓から下を見下ろすと、あの人と目が合った。意外にも近い距離に居たのである。

あの方は黒い瞳で私の視線を捕え、柔らかく微笑んだ。その顔はとても美しかったけれど、鏡で見ていたものとは少し違うような印象を受けた。瞳の色もよく見ると黒というより茶に近いかもしれない。

とはいえ、あの方は確かにあそこで息をして、「私を」見つめている。その事実こそが重要なのだ。これではつきりしたのだから。今ここにはあの人と「私」が居て、その二つの存在は互に見つめ合うことの出来る位置にいるということが。つまり、ここで

の「私」とは部屋の中の鏡でも織物でもない。今、窓の前に立っている「私」なのだ。しかし、一体その「私」とは何者なのか？

思考がそこまで達した時、私の心はとてつもない空虚感に支配された。そして、安心して何の意識も持たないまま、あの人に語りかける。

『私』とは、何だと思えますか？」

すると、あの人は作り物のような笑顔で答える。

「貴女こそ妖精のシャロットの姫君よ。」

私は驚愕のあまり、しばらく言葉が発することが出来なかった。

「…では、『あなた』とは何ですか？」

私はやっこのことでもう一つの質問を絞り出した。あの人は少し考える素振りを見せた後で、こう答える。

「あたしも姫なの。これから愛する騎士のところへ行くのよ。」

姫、騎士、愛する、という言葉が殆ど理解されないまま、私の思考回路に絡み付く。

神経のどこかに何となく嫌な感じを覚えるのは何故だろうか。

やがて、あの方は一言、「貴女にも良い男が見つかるの良いわね」とだけ言い残し、わき目も振らずにまっすぐ駆け出した。その先には立派な身なりをした人物が悠然と立っていた。「姫」は「騎士」の胸に飛び込むと、さっきの無邪気な表情とは違ってかわっ

て、熱に浮かされたような顔になった。その表情はあの時見た村人たちと何一つ変わらないものだった。

胸を抉られるような心地がする。その時、私には見えてしまったのだ。姫、騎士、愛すること。それは私の知らない世界、知りたくなかった世界。しかしもう知らされてしまったのだ、何もかも！

その時、鏡がけたたましい音を立てて崩れ落ちた。縦に横に亀裂が走り、映る世界は歪んでしまった。織物も見えるうちに形を失い、無数の糸に帰した。歪まぬ世界の創造物にもはや居場所などないとでも言うのだろうか。

シャロットの「姫君」は床の上にくぐりと倒れこんだ。そのまま動く気配はない。吐息の音すら聞こえない。やがては人魂の気配すら失せ、死の部屋は暗黒の静寂に包まれていった。

翌日、まだ夜が明けきらない頃、人気を失った部屋の中に「騎士」のような身なりをした人影が何処からともなく現れた。彼はぶつぶつと同じ台詞を何度も呟きながら機と向かい合い、無心に織物を続けている。傍らにある割れた鏡を見つめながら彼の言うには、

「世界の糸は縦と横に分かたれる。斜めなんて在りはしない。」

やがて、布が自身の背丈ほどの長さに到達した時、彼は機から離れ、無感動な面持ちで己の作品を眺める。純白で、光沢のある上等な絹の布だ。彼はそれを片手にひつつかむと、狭い部屋を抜け出すべく扉へ向かう。こざっぱりした床の上に、歩みを妨げるものは何も無かった。

彼は何ということもなく、地上へつながる長い階段を下り終えた。そして、足が土を踏んで湿った空気が肌に触れた時、目の前を流れる川の岸辺に二隻の小舟が泊められているのを見つけた。あたりには分厚い霧がもよもよと立ち込めている。彼は一つの小舟に、自らの持つ白い布を横たえると、舳先に文字を刻み込んだ。

ただ一言、*< The Lady of Shallot >*のみ。

そして、両手を合わせて一礼すると、ひと思いに小舟の背中を蹴り上げた。舟は川の流れて乗ってまっすぐ進んで行ったが、その先に何が在るのか彼にも全く分からない。彼はしばらく青ざめた顔でその場に立ち尽くしていたが、小舟の全身が霧に吸い込まれていくのを確認すると、急に血の気を取戻して、褐色の目を鋭く光らせた。

視線の先にはもう一隻の小舟。彼は自らそこへ乗りこむと、ゆっくり、しかし着実に舟を漕ぎ進めて行く。川の流れとは逆方向だった。進むにつれて霧は濃く、深くなっ

ゆく。だが、この先に何が待ち受けていようと、彼の瞼の裏に映し出される風景が揺らぐことは決してないだろう。

そこにあるのは終わりの見えない長い川と、その兩岸に広がって果てしなく続く大麥やライ麦の畑。それは広々とした平野となり、地平の彼方に続いてゆく。まだ誰も目覚めぬ朝、孤独な旅路を見守るかのように、東の地平線から陽光がわずかに差し込んでいた。

二 シャロットの民

いつの時代のことでしょうか、とある豊かな国に大きな二つの塔がありました。それらは非常によく似た作りの建物でしたが、けっしてお隣さん同士というわけではなく、片方はこの国の東の端、もう片方は西の端に立っていました。

そんな二つの塔の間を繋いでいたのは、ゆったりと流れる大きな川。それは何百年たっても変わらずに、絶えず同じ方向へと流れ続けている頑固者でした。まるでその流れに誘われるかのように、土地を歩く人の群れは皆、揃いも揃って同じ向きに流れて行くのだから滑稽なものです。

ところで、その歩行者たちは皆、やっと成人になったくらいの子供ばかりでした。これには理由があります。「若い子供たちは東の塔に住み、成人すると西の塔に住む」というのが、この国のしきたりだったからです。それゆえ、春の訪れる頃はいつも、成人した若者たちが東から西へ向かって練り歩くのでした。

どちらの塔にも部屋がたくさんありました。そこで、東の塔の子供たちも、西の塔の大人たちも、一人につき一部屋ずつあてがわれて、自分の「仕事」を毎日飽きもせず、繰り返しながら、一年中閉じこもっております。外の世界など忘れてしまうほど、彼

らは仕事に熱中していたのです。

部屋の構造は何処でも同じでした。小さな空間の真ん中に机と椅子がひっそりと置いてあり、その前に架かっているのは大きな鏡。これはいわゆる「魔法の鏡」というやつで、目の前の像などには目もくれず、絶えず奇妙なものばかりを映し出しておりました。そして、その映像をじっくりと眺めながら皆は作業に勤しみました。なにせ、いつも机に向かっていている彼らにとって、この鏡は世界を見せてくれる唯一の窓だったのでから。

では、そろそろ二人の主人公に登場してもらいましょう。東の塔の最上階に、ある十代半ばほどの少年が住んでおりました。しかし私は彼の名前を知りません。なぜなら、彼はまだ名の知られるようなことを何も果たしていないからです。

一方、西の塔の真ん中くらいの階には、白髪之交じった初老のおじさんが住んでおりました。彼の名前も知りません。なぜなら、この人は名を知られるような事を果たす前に、すっかり年を取ってしまったからです。なんとも平凡でつまらない「名無し」の二人に思われますが、彼らこそがこの物語の主人公なのです。

少年の部屋の鏡に映る風景は、大きな川に沿った一本道で、その先には霧に包まれた塔のような建物が堂々と立っていました。それを盗み見ながら、彼は古い書物を開き、ひたすら紙に文字を書き写しておりました。

とはいえ彼自身、その書かれた言葉の意味などは愚か、鏡に映る塔がどんな所なのかも知りません。ただ、自分がいずれそこへ行くということだけは予想出来ていました。なぜなら、大勢の若者たちが向こうへ進んで行くのを見たからです。

少年の目には、真新しい背広を着た年長の彼らが、とても輝いて見えました。だから、「きっとあそこへ行けば自分も幸せになれるだろう」と彼は無条件に信じていたのです。書物の無駄な分厚さにうんざりしながらも、少年は明るい未来への期待に胸を膨らませるのでした。

一方、おじさんの部屋の鏡に映るのは、風景でも何でもなく、まったく味気ない文字や数字ばかりでした。机の上には膨大な量の書類が山となって連なり、彼はそれらに一枚ずつ目を通しながら、ずっと頭をひねり続けていました。

彼は高い言語能力を持っているにも関わらず、たった一枚の書類すらまともに理解することが出来ません。けれども、鏡に映る数字の意味だけは分かっていました。だから、彼は数値が上がるとやたら得意げになり、逆に下がると苦々しい顔で舌打ちをするのでした。

紙の山に埋もれながら、電話機が四六時中やかましく音を立てています。そんな時、彼は受話器を取って、ひたすら「すみません」とか「検討中です」などと適当に発言を繰り返すのですが、全くもってきりがありません。

しかし、こんなに苛酷な環境の中に置かれていながらも、彼はそれなりに幸せでした。なぜかって？こうしていれば、彼は少なくとも暖かい塔の中で最低限の生活は送れるのですからね。「外で野垂れ死にするよりはましだ」と、おじさんは口癖のように呟くのでした。

ある晴れた日に、この国へ小さな悪魔がやってきて、こっそり視察を始めました。ところが、苦しみながらもひたすら真面目に仕事をこなす国民の姿を見ると、悪魔は何だかとても嫌な気持ちになってしまいました。というのも、この「悪魔」という奴は、秩序と勤勉を嫌う根っからの無法者だったのです。

悪魔は東西の塔の周りを飛び回りながら、どうにかしてこの忌まわしい国民たちに一泡食わせてやれないだろうかと考えを重ね、やっこのことで一つ素敵なアイディアを思いつきました。そして、ころころと笑い声を立てながら、東の塔へ飛んで行きました。

例の少年はいつものように黙々と作業を続けていました。悪魔は窓の外から彼の熱心な姿を見つけると、「まずは手始めにこいつからだ」と呟いて、こっそりと怪しげな呪文を唱えました。すると、何とこのことでしょう！少年の鏡が一瞬ばかりと光ったかと思えば、映っていた風景の一切が消え失せてしまったのです。

驚いた少年が鏡の中を覗き込むと、そこに映ったのは彼自身の姿でした。これでは魔法の鏡も形無しです。しかし、悪魔の所業はこの程度では留まりません。鏡に映る少年の姿は見る見るうちに老いてゆき、やがてはむすっとした表情の恐ろしい老人に変わってしまったのです。

その顔の醜悪さといったら、筆舌に尽くしがたいものでした。深く刻まれた眉間のしわに、覇気のない瞳、髪はほとんど抜け落ちて：何よりも恐ろしいのは、幸福の影などは少しも覗えない、卑屈と退屈のにじみ出たような暗い形相でした。

少年がすっかり震え上がってその場で立ち尽くしていると、悪魔が入ってきて言いました。

「これがお前の将来だ。こうなりたくなかったら、今みたいな生活はやめることだな。」少年はしばらく呆然としていましたが、鏡に再び目をやると、そのまま部屋を飛び出して行きました。その途端、鏡はけたたましい音を上げながら粉々に砕け散って行きました。悪魔は少しびっくりしつつも、自らの勝利を確信すると、にやり笑いを浮かべながら東の塔を後にしました。

その後、悪魔は次の犠牲者を探すべく、今度は西の塔の周辺をうろろと彷徨っていました。すると、一つの窓から実に耳障りな電話機の音が聞こえてきました。気になってその部屋を覗いてみると、例のおじさんが受話器に向かってひたすら謝罪を繰り返し

ている最中です。

これは面白そうだ、と思った悪魔は、先程と全く同じ手法でこのおじさんに悪戯を仕掛けることにしました。そして、同じように呪文を唱え、同じように事は運んだのですが、鏡に映った未来の姿はさっきの少年よりもさらに悲惨なものでした。ただ醜いだけでなく、病を患っているようで、ひどく咳き込んでいたのです。

悪魔はまたしても「これがお前の将来だ。こうなりたくなかったら、今みたいな生活はやめることだな」と言い聞かせました。

おじさんは衝撃を受け、ずいぶん長い間悩んでいる様子でしたが、やがて意を決したように頷くと、部屋の外へ出て行ってしまいました。ここでも鏡が粉々に崩れてしまったことは言うまでもないでしょう。かくして悪魔は二人の人間に勝利したのでした。

さて、哀れな人間たちの末路が気になった悪魔は、こっそりと後をつけることにしました。まずはおじさんを追うために外へ出ると、そこは嵐の最中さなかでした。さっきまでは晴れていたはずなのに、とても奇妙なことですね。お天道様でもお怒りなのでしょうかとにかく、ひどく視界の悪い中、悪魔はようやく川の沿岸におじさんの姿を見つけました。彼は水辺に浮かぶ小舟に乗り込もうとしているところでした。川の水はいつもより量を増して荒れ狂っています。こんな日に舟に乗るなんてとても危険です。でも、悪

魔はあえて放っておくことにしました。

おじさんはペンと受話器しか握ったことのないような手で、オールを漕ぎ始めましたが、進行方向が水流とは逆だったため、すぐに押し返されてしまいます。拳句の果てには舟ごとひっくり返り、おじさんは川へ投げ出されました。

可哀そうに、彼はずっと引きこもっていた上に、老体で体力が衰えていたので、波に抗うことが出来ず、そのまま溺れ死んでしまいました。その姿を見た悪魔は、さすがに少しは良心が痛んだのでしょうか、渋い顔でそそくさと飛び去って行きました。

では、少年の方はどうなったのでしょうか？ どうやら彼もこの嵐の中、同じように川の岸辺に止めてあった小舟に乗りこんだようです。彼は若くて力が強かったので、オールを漕ぐことは難なく出来ましたが、調子に乗ってスピードを上げ過ぎたせいで舟は転覆してしまいました。川に落とされながらも何とか舟の残骸にしがみついた少年は、そのまま水流に従って流されて行くのでした。

やっと嵐が収まり、川も流れもなだらかになった頃、少年は何処かの川岸にたどり着きました。陸に上がって、前方を見渡すと、そこには古ぼけた大きな塔が立っていました。

彼は一瞬、自分が元の場所に戻ってきてしまったのかと錯覚しましたが、あれだけ流

されてきておいてそれはないだろうと思ひ直し、その塔の門を潜ってみることに決めました。どの道、一刻も早く何処かの建物に入らないと、ずぶ濡れで凍え死にそうだったのです。

塔の中に入って階段を上っていくと、どの階にもたくさんの扉があり、いずれの部屋からもけたたましい電話機の音と謝罪の声ばかりが響いておりました。その音を聞くにつれて、少年はいささか恐ろしくもなってきたのですが、後ろを振り返ってみると、困ったことに自分が上ってきた階段は跡形もなく消え去っているではありませんか！こうなった以上、もはや進むしか道はありません。

少年は階段を上り続けました。そして、ちょうど塔の真ん中あたりの階に到達した時、扉が一つだけ開いているのを見つけました。その部屋は、割れて粉々になった鏡と乱雑に置かれた書類のせいで、ひどく散らかった印象でした。

しかし、どういうわけでしょうか、少年が扉を潜った瞬間に、まるで魔法のように一瞬で全てが片付いてしまったのです。机の上にはきっちりと重ねられた書類の束に、新しい電話機、そして壁にきらきらと輝く立派な鏡。これらの品々は、少年の幼い虚栄心を満足させるのに充分すぎる程の代物でした。

誰に指図されたわけでもなく、彼は机に向かい、早速仕事を始めました。その顔に苦痛の色は見えません。仕事内容は違えども、黙々と作業を続けて行くことに、彼はもと

もと慣れていたのです。そうして、「いつものように」少年は引きこもり生活を始めるのでした。

数十年後、悪魔が再びこの国を訪れました。昔と変わらぬ広い大地に、ゆるやかな川の流れ、これらは少しも変わっていませんでした。しかし、何処か違和感があります。不審に思った悪魔は、あちこちを飛び回ってみました。するとおかしなことに、何処にも人間の気配が感じられないのです。西の塔にも、東の塔にも、人影は一つも見当たりません。悪魔はすっかり面喰って川岸に佇んでいると、一羽のカラスが飛んで来て言いました。

「やあ、悪魔さん。浮かない顔してどうしたんですかい？」

悪魔は人間たちの行く末について尋ねました。すると、カラスが言うには、

「人間どもの愚かさにはまったく驚いちゃいましたよ。昼も夜も仕事ばかりしていやあ過労死したって文句は言えませぬ。若い人たちが揃いも揃って自殺したってのも、こりゃあ見ようによつてはまったく正しい選択でさあ。どうせ死ぬんなら、苦しみはなるだけ短い方が良いでしょうからねえ。あんたもそう思うでしょう？」

悪魔はしばらく何も答えず押し黙っていました。やがてカラスが飛び去ってしまうと、ようやく口を開きました。

「人間は哀れだ。」

悪魔は静かに呟くと、上空をひとつ飛びして、西の塔の天辺に大きな鎌を突き立てました。すると、西の塔の壁がばらばらに崩壊したのを皮切りに、なぜか東の塔までもが跡形もなく粉々に崩れ去って行きました。なんとあっけないことでしょう！

悪魔はいかにも意味ありげな笑みを浮かべながら二度頷くと、そのままどこかへ飛んで行ってしまいました。残されたのは砕けた石の残骸と、のびのびとした自然の風景のみ。この国が「楽園」と呼ばれる日も、そう遠くはないかもしれませんね。めでたしめでたし。

この世に生を受けてから、一体どれだけの年月が経ったことだろうか？もはや今私には、幼少期のような純粹さは欠けているのかもしれない。しかし、いくつ年を重ねても忘れることのできない思い出というものが、私の心には一つ存在する。それを何とかして人に伝えられないものかと今までずっと苦心してきたが、ようやく念願が果たせうだ。これから書く年寄りの戯言を読んで、少しでも何かを感じてくれる人が居たら、私としては実に本望である。

さて、当時の私はほんの小さな子供で、今と変わらぬ川沿いの大きな屋敷に住んでいた。裕福な貴族の家に生まれたおかげで、お金に関しては何もわずらうことなく生活することが出来たのだが、生まれつきやんちゃな性格の子供だったために、いつも屋敷を抜け出しては、両親や使用人たちに叱られていた。(それでも次の日にはけろりとして、再び冒険へ出かけたものだが。)

ある日、私は小舟に乗って川をずっと先まで下ってみることにした。進んで行くにつれて、人里から離れていくのを感じたが、心細いとはこれっぽっちも思わなかった。む

しろ、これから待ち受ける未知の冒険に心を躍らせる気持ちの方が、幼心には強かったのである。

人の気配が途絶えてから数分後、川岸にうっそうと生えている柳の木を通り過ぎようとしていた時、私の胸は高鳴った。前方の小島に、世にも不気味な塔が聳え立っていたのである。私は好奇心に誘われて、どんどんその島へと舟を漕ぎ進めて行った。

舟を岸に泊めると、私は島へ上陸した。色とりどりの花畑に囲まれた灰色の城壁が、とてつもない存在感を放っていたが、それは城壁というにはあまりに頼りないものだった。そこかしこにひびが入り、今にも崩壊してしまいそうなくらい傷みきった石の塊が、なんとか塔のような体裁を保っているだけである。

この様子では、おそらく中には隙間風が入りこんで、冬などはさぞ寒かろう、と私は中の住人を憐れんだ。(とはいえ本当のことを言うと、こんなぼろ家に人が住めるなどとは、あの時、心にも思わなかった。)

私はほんの冗談で、塔の入り口の扉を叩いてみたが、案の定、誰も出てくることはなかった。しかし、このまま帰るのも何となくつまらない気がしたので、私はどうにかしてこのぼろ家に入ってやろうと策をめぐらした。

だが、そうこうしているうちにだんだん日は落ちてゆき、あたりは夕焼け空に包まれていった。それでも諦めきれずに扉の周りをうろうろしていると、頭上の方から誰かが

声をかけているのに気付いた。その声はこう言っていた。

「こんなところに来てはいけない。ここは君の居て良い世界じゃないよ。早く帰りな。」
怖いもの知らずの私は、どういふことかと聞き返した。あなたに指図される覚えはない。私は私の意志でここに居るのだ、と。すると声は次のように主張した。

「君がこんなところに来ていると知ったら、ご両親はさぞや心配されるに違いない。ここは辺境の地。隔離された弱き民が住む世界だ。君は早く戻らなくてはならない。君の居るべき世界へ。そして、忘れるんだ。ここで見た一切の物を。じゃないと君まで孤独と飢えの中で苦しむことになるぞ。さあ、早く行け。舟を出せ。二度と戻って来なよ！」

その声の激しい剣幕に押されて、私は急いで舟を出した。

帰り道、さっきの奇怪な出来事について、私はあれこれと思いをめぐらしてみた。あの声は確かに塔の上から聞こえていた。それも建物の中からだ。だとすると、声の主はあのぼろ家の住人だったのだろうか。思えば、少し元気のなさそうな声をしていた。もしかしたら飢えに苦しんでいる貧乏人なのかもしれない。

それにしても、あの声が異常なほどに私という侵入者を拒んでいたのは何故だろうか？それも嫌悪からではなく、単純に私の身を案じてくれている様子だった。これは一

体どういふことなのか？

帰宅した後で、私は例によって家の者たちから叱責を受けた。だがその間も、私の心にはさっきの事が取り憑いて離れそうになかった。そして、両親とともに食卓についた時、思いきって先ほど経験した奇怪な出来事について語ってみることにした。

私はその時の両親の顔を、生涯忘れることが出来ないだろう。小舟に乗って出かけたところまでは、（やんちゃな子供を持つ親であるだけに）両親はいつも通りの呆れ顔で聞いていたのだが、話がああ「ぼろ家」のところ差し掛かった時、急に彼らの表情が曇った。

私は構わず話を進めていたが、そのうち（ついに我慢できなくなったのであろう）母が口をはさんだ。

「あの島へ行ってはなりません。」

その声があまりにも冷たいのに驚いて、私は話を中断した。そして、なぜそんなことを言うのかと尋ねた。母は少し迷った後でこう答えた。

「あそこはあなたの居て良い世界ではないのです。」

あの声と全く同じことを言われた！私はその言葉の意味を未だ呑みこめず、ひたすら理由を尋ねた。すると両親は何か答えづらいことでもあるような素振りです、しばらく黙っていたが、やがて父が沈黙に耐えかねて口を開いた。

「あの塔の中には、恐ろしい怪物が住んでいるのだ。お前が行ったら殺されてしまうぞ。」

いや、これはきつと嘘だ、と幼い私の本能は感じ取った。また大人が隠し事をしようとしている。秘密がばれたくないから本当のことを言わないのだ、と。私はその後すぐに食事を終えて寝室へ向かった。

次の朝、まだ家の者たちが起きてくる前に、私は目覚めた。そして、抜き足差し足で屋敷の外へ出ると、前の日と同じ小舟に乗ってあの島へと出かけた。

腕には小さな包を一つ抱えていた。中身は、夕食の時にこっそりくすねておいた一欠片のパンと、つたない字で丁寧に書かれた手紙が一通。

私は難なく島に上陸すると、例の塔を見上げた。最上階の窓が開いている。思ったより高さはなさそうだ。これなら大丈夫かもしれない。そう思った私は、深く息を吸った後、持っていた小包を思いっきり振り投げた。それがうまい具合に最上階の窓へ吸い込まれていくのを見て、私の心は歓喜に踊った。その日の作戦は大成功だったのである。

次の日も、それまた次の日も、私は同じことを繰り返した。両親には全くばれていなかった。いや、たとえばれていたとしても全く構わなかった。だって私は、自分が正しいと思うことをしていただけなのだから。今思えば、あの頃が生涯で一番、充実感に満ちた時だったのかもしれない。

ちた時だったのかもしれない。

やがて冬がやってくる、私の心は不安にかられた。あの貧しい人は今頃、寒さに凍えているのではないか。そう考えると気が気ではなかった。

初雪が降った次の朝、私はいつものパンの他に、暖かい外套も持って行くことに決めた。けれど、あの人はきつと大人だから、子供用の小さな外套など着られないだろうと思ひ、私は母の部屋にかかっていた大きな毛皮の外套をくすねて来ようと考えた。

それまで秘密がばれていなかっただけに、あの頃は随分と大胆になっていたものである。しかも実際に、外套を盗み出すことに成功してしまったのだから驚きだ。

外には雪が降っていた。私は急いで小舟に乗り込むと、浮き浮きとした気持ちで島へ向かった。これであの人は寒い思いをしなくて済む。頭にあるのはそのことだけだった。今考えてみると、なぜ幼い私がこれほどまであの貧乏人に関心を寄せていたのかよく分からないが、きつと子供心に何かしら引っかかる場所があったのであろう。

ひどい寒気かんきにも関わらず、あの窓はその日も開けっ放しにしてあった。私は足取り軽く島へ上がると、いつも通りパンの包みを放り投げた。そして、しっかり窓の中へ入ったのを確認すると、今度は母の外套も同じ要領で窓に投げ入れようとしたのだが、残念なことに、外套は際どいところで窓枠をかすり、落ちてきてしまう。何度挑戦してみ

も結果は同じだった。

それでも諦めきれずに何度も投げ続けていると、実に驚くべきことが起こった。なんと、窓の中から包帯に血を滲ませた瘦せぎすの拳こぶしが伸びて来て、外套をがばっと掴み取ったのだ。

あの時の感動には、なんとも計り知れないものがあった。ついに私は塔の「怪物」と会い見えたのだから！

貧しい人は外套を部屋の中に手繰り寄せると、そのまますると身に纏った。そして窓から身を乗り出すと、私の顔をまじまじと見つめて言った。

「いつも差し入れをくれていたのは君かね？」

私は黙って頷いた。

「君のくれたパンのおかげでここまで元気が出たよ。ありがとうな。」

あの人はからからと笑いながら言った。その顔は、全く「恐ろしい怪物」などではなく、むしろ見ている気持ちの良いほどに端正で凛々しい顔立ちだった。顔に垂れ下がったぼさぼさの黒髪からのぞく両目はすうどい光りを放ち、見る者の目を惹きつけてやまないものがあった。

私はすっかり嬉しくなって、次のように言った。あなたはこれからもっと元気になるだろう。私はあなたを屋敷へ連れて帰りたいのだ。両親は反対するだろうが、今に説得

してみせる、と。

するとあの人は一瞬表情を歪めた後、少し間を置いてから答えた。

「…では、そのうち訪ねるとしよう。」

その時の私は気分が高揚していたため、その言葉に潜むただならぬ気配には、全く気づいていなかった。そういうわけで私は、また会いに来ることを約束すると、非常に清々しい気分ですぐ家へ帰ったのであった。

その日の夕方になってから、両親がきわめて不機嫌な顔でリビングに入ってきた。まさか外套のことがばれたのか、と一瞬焦ったが、どうやらそういうわけではないらしい。しばらくとんよりとした嫌な沈黙が続いた後、「落ち着いてよく聞け…」と父が話を切り出した。

「もうすぐこの近辺に例の『怪物』がやって来る。村の者が見たそうだ。奴が小舟に乗ってあの川を下ってくるところを。しかし安心しろ。もしこの屋敷まで来るようだったら、銃で撃ち殺してくれるからな。」

私は耳を疑った。あの人がここへ来る。そのこと自体はいっこうに構わない。だが、ここへ来たなら殺されてしまうのだ。どうにかならないものか？私は小さい頭を悩ませたが、ついに何も考え付くことができなかった。

その後、父が銃を抱えて雪降る村へ出かける一方、母はいかにも無関心な様子で、自室へ戻って行った。私は母と家に残るよう言いつけられていたのだが、居ても立ってもいられずに、父の後をこっそりつけて行くと、風にたなびく枯れ木の陰へ身を隠して様子を見かけた。

そこでは父だけでなく、銃をかまえた大勢の「英雄」たちが一人の「怪物」を狙って待ち構えているところだった。(全くとんだ英雄が居たものだ!)彼らからあの人を守ることが不可能なのかもしれない、とその時私は半ば悟っていた。

雪はやがて吹雪に変わった。吹きすさぶ風は大地を荒らし、襲い掛かるような勢いで水の刃を四方八方に叩きつけていた。視界が白く霞む中、凍りかかった水の上を、暴風に後押しされながら現れたのは、一隻のみすぼらしい小舟。

そこには見覚えのある毛皮の外套が、堂々と聳え立つ瘦せた人影を黒く覆い隠していた。船上の人は一瞬私のほうに目をやると、にやりと笑みを浮かべて、黒装束を脱ぎ捨てた。

隠されていた真紅の衣が雪を背に激しく燃え上がった!父はその姿を見つけると、声高に叫んだ。

「怪物が現れたぞ!撃ち殺せ!」

一斉に鳴り響く銃弾の音。しかし、弾は掠りもしない。勢い付いたあの方は懐から銃を取り出すと、手当たり次第に撃ち放った。その弾のいくつかは見事に命中したので、父の仲間たちはどんどん減っていった。だが、一体あと何発残っているのだろう、あの弾は?川岸の兵隊は、もはや数えるほどしか生き残っていない。そのひどい有様を見ると、あの人は高笑いしながらこう言った。

「負けを認めろ。弱き民よ!」

それに対し、父は首を横に振ってきっぱりと言い放った。

「お前のような怪物に我々貴族が負けるはずなどない。」

すかさず、父の脳天に弾丸が走った。その一連の出来事を、幼い私はただ信じられない気持ちで見つめていた。気づいたら足元には生気を失った父の抜け殻が、足元に転がっていたのだ。これは幼子にとってあまりの衝撃だったろう。

実際、そのあと数分間の記憶は、まったく曖昧で断片的なものしか残っていない。ただ、ほんやりと覚えているのは、しばらくして付近の村々からおびたらしい数の援軍が現れたこと。そして、あの貧乏人が、放心した私をじっと見つめていたということ。

その顔はさながら夢うつつにある豪胆な予言者のごとく、己が身の上の不運を一切見据えているかのようにだった。

圧倒的多数の兵隊たちが銃を乱射すると、あの人は船上に崩れ落ち、そのまま下流の

方へと流されて行った。私は何を思ったのか、響く「英雄」たちの歓声に背を向けて、とっさに駆けだしていた。そして気づいた時には、ひとひ人氣のない川岸に佇んで、舟の中に横たわる冷たい亡骸と向き合っていたのであった。

死者はその唇に幽かすかな微笑みを浮かべていたが、何故かどことなく哀しげな表情に思われた。閉じられた脛かすの合間には、滴りそびれた涙の粒が氷の塊となり、行き場を失ったまま凍りついていた。

よく見ると、赤い包帯を巻いた青白い手は、何かの紙切れを握りしめていた。引き抜くと、それは誰かに宛てた手紙のようだ。私は「もしや」と思って開いてみると、そこにはこう書かれていた。

「君の手紙に返事をしたい。塔へのぼりたまえ。」

私は複雑な面持ちで、傍らにころがる黒い外套を、凍れる肉体の上に被せると、そのまま屋敷へ帰って行った。

その後、数日間は心の整理がつかず、ずっと屋敷にこもりきりだった。母は毎日のようにあの貧乏人のことを「氣違いの人殺しめ！地獄へ堕ちるがいい！」と罵り続けていたが、父の話をする時だけはまるで別人のようになった。

彼女はいつも決まって、「あの人の最期はとてご立派でしたわ。まさにこの村の英

雄ですよ。たとえ離れ離れになっても私たちの絆は変わりませんからね。」と言いながら、さめざめと涙を流すのであった。(しかし、はたして母は父の「ご立派」な「最期」を実際にその目で見たのだろうか？いや、そんなはずはない。あの時、母は部屋にこもっていたはずなのだ。)

そんな日々が続くにつれて、いつしか私は母に対してこう思うようになっていた。流す涙がそんなに有り余っているのなら、あの「人殺し」にほんの一滴でも分けてやれば良いのに、と。

だって、父もあの人を銃で撃ち殺そうとしたのだから、それこそ「人殺し」と同じようなものではないのか？その父が「英雄」と呼ばれて死を悼んでもらえるのなら、あの人にだってその権利はあるはずだ。

そこまで考えた時、私の心にふと光がさしたように思われた。もはや迷うことは何もない。その日、私は久しぶりに、小舟で旅へ出かけようと決心したのであった。

しばらく無人であったのにも関わらず、塔の風貌は以前と全く変わっていないかった。窓すら開け放ったままである。私は塔の入り口へ近づいて、扉を開けようとしたが、鍵がかかっているようで、びくともしない。

怪訝な顔で立ち尽くしていた時、開いた窓の中から大きなミミズクが羽ばたいてき

て、何か光る物を落として行った。拾い上げてみると、それは錆びついた銀製の鍵であった。私ははっとして空を見上げたが、もうあの鳥は何処かへ消えていた。なんとも奇妙なめぐりあわせに首を傾げながら、私はその鍵を使って扉を開き、塔の中へと入って行った。

狭くて急な階段を上り終えると、小さな部屋が一つあった。窓が開いているところを見る限り、おそらくここがあの貧乏人の住んでいた場所の間違いないだろう。それにしても質素な部屋だ。あちこちから隙間風が入るこの肌寒い空間に目ぼしい家具といえど、せいぜい織物の機と、ひび割れた鏡くらいだった。

私は興味深い眼差しで辺りを見回した。すると、ぎしぎしと軋む床の上に、この部屋の端から端よりずっと長い織物が落ちておにに気付いた。見ると、どうやらそこには絵が描いてあるようだった。

私はその織物を拾い上げると、左端のほうから順に眺めていった。まず目についたのは、紅い衣を纏って踊る人々と、楽しい宴の風景など。これらはとても美しい絵だったが、私の屋敷にある絵画とは全く違う世界の代物に思われた。(おそらく私の両親ならとても買ってはくれまい。)

最初のうちは陽気なものばかりだったが、右へ進むにつれて絵はだんだんと暗い様相を帯びてきた。血に塗れた戦い、泣いている子供たち、飢えて死にかけている農

夫。そして何より印象的だったのは、いつも苦しむ彼らの隣で嘲笑を浮かべている傲慢な人々の姿。彼らは皆、私の父や母と似たような恰好をしていた。

さらに右の方へ進むと、紅い衣の兵士が、この傲慢な人たちを血祭りにあげている風景があり、そこで織物は終わっていた。一通り眺めているうちに、私は何となくこの織物が気に入ってしまったので、屋敷へ持って帰ることに決めた。

長い布を小さくまとめて、部屋を去ろうとしていた時、一つ気になるものを発見した。割れた鏡の鋭利な亀裂に点々と赤黒い血痕が残っていたのである。私の心には、あの貧乏人の瘦せぎすの腕がぼんやりと浮かび上がってきた。はて、一体何があの人の拳を傷つけたのだろうか？そんなことを考えながら、私は帰路についた。

もはや、知りたかったことは大方分かったように思う。あの貧乏人は、塔の中で約束通り「手紙の返事」をくれたわけである。

始めてあの人に差し入れをした日、私は小さな手紙につたない字でこう書いた。

「あなたはこうして『怪物』と呼ばれているの？」

きっと答えは、この織物一つで十分なのだろう。まったく人間というものは、自分と大きく異なる存在を目にすると、ついつい「怪物」のレッテルを貼ってしまいがちなものである。その結果、自分の身まで滅ぼしてしまうことがあるとは知りもせずに。

私はこの素晴らしい芸術品を、屋敷の一番目立つ場所に飾ることを誓った。
この命が絶えた後も、世界を見守り続けてくれるように。
恐ろしい「怪物」を、真の意味でこの世から抹消するために。

あとがき

この世界のあらゆる場所に、シャロットの塔は建っています。そして、その中に住むのは私たち、全ての人間。人それぞれ形は違って、誰もが自分の塔を持っています。子供の頃は勿論、大人になっても、その中から逃れることはできません。仮に運よく逃れたとしても、その先には耐えがたい大きな苦痛と困難が待っています。そういう時、人はどうなってしまうのでしょうか？

今回執筆した三作は、そんな塔を出た人間の末路をあらわしたものです。読者が共感するかどうかは別として、個人的にはなかなか良い「主人公」が描けたのではないかと思います。彼らが私の思想の断片を少しでも伝えてくれれば、それは実に幸いです。

ただ、このシリーズはたったの三作で終わるようなものでは決してありません。これから先も、様々な形の「塔」を目にすることになりましょうから、その時にはまた続編でも書いてみようかと思えます。

なお、この後に付録として、私が初めて書いた「習作」の文章を載せておきました。こちらも「シャロットの女」に関連するものなので、興味のある方はご覧ください。

「ラインスロットの見た夢」

キャメロットへ帰り着いた私は、いち早く宮殿へ出向いた。王は大変喜ばれたし、騎士たちも（なにも全員とは言わないが）多くの者は私を快く迎え入れた。ただ、王妃は口をきくことはおろか、視線の一つすら交わしては下さらなかった。

あくる夜、自室の寝台に横たわり、一人物思いに耽っていた時、不意に視界を闇が包んだ。そして、その闇がようやく晴れたと思われる時、私は見知らぬ場所をひたすら歩いていった。地獄の果てまで続いているのかと思われるほど長い回廊に、人影は一つも見当たらず、出迎えるのは表情の見えない殺風景な白亜の壁ばかり。

此処は何処で私は何をやっているのか、と自問する理性すら今の私には残されていない。ただ、何処からともなく漂う薔薇の香りに誘われて、足のみがまるで独立して意志を持つかのように動き続けている。

しばらく歩いた後、ふと懐かしい感覚に見舞われて顔を上げると、そこには純白の薔薇を髪にさした女が儚げな背中をこちらへ向けて佇んでいた。その白い香りが鼻腔を刺激する時、私の本能が叫ぶ。ここに居られるのは私の愛するあの御方にちがいない、と。

女は物言わぬ石像のように、しばらくはびくともしなかったが、やがてすうっと体を

回してこちらへ振り返る。その姿を一目見て、私はあっと叫んだ。間違はなく、愛する王妃の姿ではない。それは色を失った蒼白の顔に、埋め込まれた黒曜石の瞳がざらりと光り、ある種の神秘性を帯びた乙女の姿。

彼女は彫刻のように無機質な顔で私を見つめ、頭を飾っていた白薔薇を一つ抜き取る。そして、まるで白百合の花をいつくしむ聖母のように穏やかな笑みをたたえながら、手のひらに薔薇の花を包み込み、そのままぐしゃりと握りつぶしてしまった。

すると、不思議なことが起こる。殺された白薔薇の骸がまるで血にぬれたように紅く染まったのである。白魚のような指の合間から真紅の花弁がはらはらと散り、その瞬間、私は金縛りにあったかのように身動きが取れなくなった。途端に二つの黒曜石がじりじりと近づいてきて、やがて目の前は黒一色に染まった。

眼の先を覆い隠す黒が消え去ったとき、そこには先ほどの女も白い回廊も見えなくなっていた。闇夜を閉じ込めたような暗い部屋を灰色の壁が取り囲み、背中には窓が一つある。窓から差し込んだ青白い月の光が照らしたのは、ひび割れた大きな鏡。床には、手折られたと見られる無数の白百合の花が、そこかしこに散らばった色とりどりの糸に絡めとられて、恨みがましく私を見つめていた。

私は百合の花を踏まぬように気を付けながら、ひび割れた鏡の前に立ち、じっと覗きこんだ。ところが奇妙なことに、鏡には何も映らない。白銀は霧に埋もれ、ただ白く曇っ

てゆくだけである。どうしたことかと怪訝な顔で眺めていたら、突然、何処からともなく哀しげな歌声が響いてきた。誰かいるのか、と思いい周りを見渡すが、人影はない。やがて目の前の鏡が光りだしたかと思えば、先ほどまでは何も映していなかった鏡の中に、ある奇妙な光景がぼんやりと浮かび上がった。

そこは薄暗い部屋の中。視界を明るくするものは、たった一つの小さな蠟燭の炎のみ。鏡が曇っているのはつきりとは見えないが、何処かで見覚えのある空間。部屋の中央には、死人のように青白い頬をした乙女が一人、寝台に横たわっている。その眩いばかりに黒々と輝く髪の色は、彼女の年の若さを物語っていたが、片袖を失くして血のように紅く燃える衣に包まれた姿は、幽かに死の冷気を纏っていた。

寝台の傍らには男が二人いる。見たところ、老人と青年のようだ。彼らは一分一秒も離れまいといった面持ちで、乙女の寝台にひしと縫り付いている。その姿はまるで、死神の凶器が振りかざされるのを今か今かと恐れ慄く哀れな死刑囚にも似ていた。おそろくこの光景を目にしたすべての人は、これが乙女の臨終の場面であることを予感するだろう。

乙女は重い唇をうっすら開き、何やら言葉を発した。何かを訴えかけているように見える。枕元には、いくらか小さくなった蠟燭の炎が、まるで消滅を恐れるかのように赤々と激しく燃えていた。

老人は乙女の言葉を聞いて、はっと我に返った。そして静かに頷くと、彼女の訴えに応えるべく、重い足音を響かせながら、部屋の外へと消え、筆と一枚の白い紙を携えて、再び部屋へ戻ってくる。

乙女は枕元に老人の姿を見つけると、薄い唇を微かに綻ばせ、溢れ出す言葉を一つまた一つと紡いでゆく。その隣で老人は自らの持ってきた白い紙に黒い文字をしたためる。どうやら彼女の言葉を書き写しているようだ。

やがて乙女が口を閉じると、老人も手を止める。そして半分ほどの短さになった蠟燭に目をやりながら、乙女は再び口を開き、これが最期とばかりに迷いのない調子で長い台詞を呟く。老人と青年はただひたすら頷いている。その光景はまるで何か重要な「約束」でも交わしているような雰囲気であった。

乙女は一通り話を終えると、ふっと柔らかい安堵の表情を見せ、もはや形を留めていない蠟燭の小さな真紅の火を愛おしげに眺める。そんな彼女の様子を見て、老人はゆっくり目を閉じ、青年は顔を俯かせせる。どうやら死期を悟ったと見える。おそらくこれがあの乙女の末期になるのであろう。

ぼやけた鏡に映る彼女の顔を見つめているうちに、私の心には次第に憐憫の情が湧き上がってきた。

「神よ、この乙女の霊に慈悲を垂れたまえ。」

私は喉の奥で呟いた。するとその瞬間、どういうわけか、今までぼやけていた鏡の霧が晴れ、彼女の顔がより鮮明に浮かび上がってきたのである。霧が露となって鏡の淵から滴り落ち、彼女の瞳の暗色をようやく見分けられるようになった頃、ようやく私は気づいた。これはアストラットの美しい乙女ではないか！私は最後に会った時、そして別れた時の彼女の顔を思い出し、胸を痛める。

そして、蠟燭の蝋は全て液体と成り果てて、小さな火が儂く揺らぎ出したその時、2つの燃える黒い瞳が鏡越しに私の顔をかっと見据えた。その瞳孔は見る見るうちに開いてゆき、もはや生気を失った。

口角は怪しく吊り上がり、唇が薄く開いた。その唇は「ラインスロット！」と幽かに叫ぶと、そのまま役目を終えてしまった。きっともう二度と開くことはないだろう。

血の気を失った青白い手に、老人が先程の白い紙を握らせると、蠟燭の最期の火はすっと消え失せた。紅は黒に呑まれ、鏡の中に闇が広がった。私は静かに目を閉じた。

瞳の裏に潜む闇の中で、再びあの哀しげな歌声を聴いた。声の主を確かめようと目を開けると、薄暗い鏡の間はすでに無く、目の前には深い碧の色をした広大な川の帯が広がっていた。水の上には睡蓮が妖しく咲き乱れ、岸には青い柳が涙を流すような姿で項垂れている。

私の足は堅く狭い木製の板を踏み、ぎこぎここと不安定な音を立てた。どうやら小さな

船の舳先に立っているようだ。前方、遠く先に見えるのはキャメロット城。船は川の流れの思うままに、まっすぐ流れていく。

このままいけばあの城までたどり着くのだろうか、などと考えていた時、ふと背後に何かの気配を感じた。私は振り返り、そして驚愕する。なんと、船上にあのアストラットの美しい乙女が、眠るように安らかな顔で冷たい体を横たえていたのである。

その右手は白い紙を握ったままの形で凍りつき、薄く開いた唇も鏡で見たのと同じ微笑を浮かべている。ただ先程と異なっているのは、彼女が世にも美しい純白の衣に身を包んでいるということである。船には無数の白い薔薇と白い百合が敷き詰められ、それらは白い衣の袖と溶け合い調和する。その光景はさながら、あたり一面に白く積もった雪が人間に踏み荒らされぬまま、ひっそりとその姿を保ち続けているかのようにだった。

そして妙なことに、そんな彼女の死装束を、私は単純に美しいと思ったのである。それはある一枚の絵画にとりわけ深い感銘を受ける時の気持ちにも似ていた。それにしてもこの画のなんと美しいことか！しかも私はこの芸術を生み出した偉大なる画家たちをすでに知っているような気がするのだ。おそらく鏡の中で交わされたあの重要な「約束」を彼らは守ったのであろう。

私は敷き詰められた花の中から薔薇を一つ手に取ると、まるで愛する人の手の甲にすするように口をつけた。甘美な香りが鼻を突いて、私は言いようのない幸福感と懐かしさ

に浸った。

だがそれも束の間、件の歌声がよりいっそう哀しさを増して響き、私の耳を突き刺した。同時に、手のひらにある純白の薔薇の花からぼたりと不気味に紅い鮮血が流れ落ち、雪のように白かった衣も、花も、凍れる手のひらに握られた白い紙も、すべては地獄の炎のような紅に染まってしまった。心なしか乙女の唇の微笑も歪んでいるように見えた。

突然の出来事に、驚きを隠せないでいると、紅く燃えるあの白い紙が乙女の手のひらから抜け出してはらはらと舞い上がり、やがて私の両目に張り付いて視界を覆った。紅の世界で、歌声だけが黒く渦巻いていた。

両目に纏わりつく「紅」を右手で引き剥がすと、目に映ったのは見慣れた自室の天井。寝台の上で体を起こすと、途端に思い出したのは、先ほどまで自分が見ていた奇妙な光景。もうあの歌は聴こえない。窓から差し込む夜明けの光が、現の心呼び覚ます。

きっと私は夢を見ていたのであろう、と思いつながら己の右手に目をやると、握られているのは赤い布。さっき引き剥がした「紅」である。しかしよく見ると、ただの赤い布ではない。これは紛れもなく、アストラットの美しい乙女から貰ったあの赤い袖である。夢と現実が重なって、不吉な予言が私の頭をよぎった。

その日の夕刻、私は城のすぐ目の前を流れる川のほとりへと呼び出された。何でも、

ある「奇妙な船」が流れ着き、「何者か」が私宛ての手紙を運んできたらしい。それにしても、私を呼びにやって来たラヴェイン卿の顔のなんと蒼かったことか！私は、その手紙の色が昨晚の夢のように「紅」く染まらないことを祈りながら部屋を後にした。

アーサー王研究会創作文庫

七色の「姫君」

著者 杵夜 龍司

2012年 1月 6日 発行

発行人 不破有理

発行所 慶應義塾大学 アーサー王研究会

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学来往舎1階 代表 045-563-1151

©2011 IRIYA, Ryuji Printed in Japan

非売品

